

新生児科

(スタッフ)

部長（第一新生児科）：飯田 浩一
 （総合周産期母子医療センター所長兼任）
 （2021. 4月から）

部長（第二新生児科）：赤石 睦美

統括部長：飯田 浩一（2021. 3月まで）

部長（第一新生児科）：長友 太郎（2021. 3月まで）

副部長：米本 大貴
 ：慶田 裕美

主任医師：中嶋 美咲
 ：岩崎 智裕（2021. 3月まで）

嘱託医：楯崎 健太郎（2021. 10月から）
 ：川上 勲
 （2021. 4月から9月まで）
 ：香月 比加留
 （2021. 4月から9月まで）

専攻医：大賀 慎也（2021. 11月まで）
 ：甲斐 陽一郎（2021. 10月から）
 ：吉里 倫（2021. 3月まで）
 ：後藤 未央
 （2021. 4月から7月まで）
 ：松本 崇雅
 （2021. 4月から7月まで、2021. 11月から）

の8名体制です（2021.12.31 現在）。飯田から慶田までは周産期（新生児）専門医を取得しています。

(診療実績)

表1 2021年の入院と転帰

出生体重 (g)	（ ）内：死亡数	
	2020年	2021年
- 499	0	2(1)
500- 749	5(1)	9
750- 999	5	4
1000-1499	14(1)	18(1)
1500-1999	39	27
2000-2499	120(1)	112
2500-3499	201(2)	194
3500-	37	35
計	421(5)	401(2)

2021年では総入院数は2020年より減少しましたが、主に体重の大きい児の入院数が減少しており、出生体重1,500g未満の児は逆に増加しました。表1に出生体重別入院数を昨年と対比させて記載します。総合周産期母子医療センター新生児病棟に入院した全

ての児（新生児科、小児外科、他科を含む）で、再入院した児は除いています。

出生体重1,500g未満の児のうち3人は他院で出生後に当院に搬送になった児です。予期せぬ早産で産科到着時にはすでに母体搬送が困難な状態でそこで出生となっています。例年より件数が多いですが、このように予期せぬ早産は避けられない事象であり、生まれたのちに安全に搬送する手段の確保が必要です。2人は当院の医師が、1名は前医の小児科医が同乗し、無事に搬送することができました。

図に過去10年間の各指標の変遷を示します。出生数の減少に伴い、体重が非常に小さい極低出生体重児の入院数は減少していています。一方、入院数は微増の傾向で、人工呼吸器装着患者数は逆に増加する傾向にあります。死亡数は2021年では2名と最も少なく、経年的に見ても減少傾向にあります。

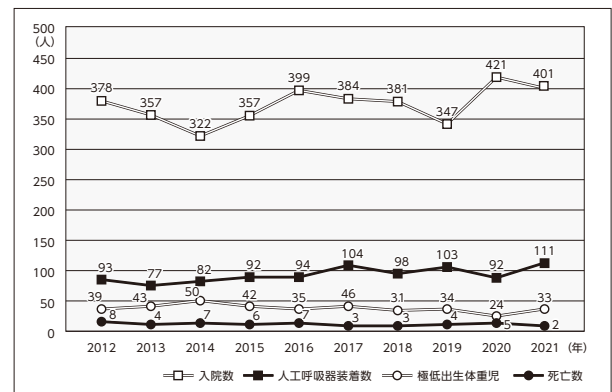


図 過去10年間の各指標の変遷

表2 カンガルー号出動件数

	2020年	2021年
	出動 (件)	出動 (件)
搬送入院	105	86
三角搬送	2	2
県病から転院	11	18
県病に転院	4	10
立会いのみ	5	5
合計	127	121

新生児専用ドクターカー（カンガルー号）の出動件数は121件でした。開業産婦人科医院からの搬送は86件と昨年より減少しました。うち3件は出動依頼が重複して自治体救急車を利用してのドクター搬送となっています。当院が満床のためカンガルー号で迎えに行き他院へ搬送した三角搬送事例は2件でした。転院搬送が28件と2020年より倍増しました。主に先天性心疾患の手術目的での県外搬送ですが、近年、複数回に分けて手術をすることが増えてきたために、一人の患者で複数回転院を繰り返すことがあ

るため、回数が増えています。

表3 医療圏別の出動件数 (単位: 件)

医療圏	2020年	2021年
中部	92	84
北部	3	1
東部	3	4
南部	9	5
豊肥	2	0
西部	7	4
県外	11	23

出動した医療圏別の件数では大分市を主とした中部医療圏への出動が多いです。出動数の増加に伴い出動依頼が重複することがあり、その際は自治体の救急車を活用してのドクター搬送となります。現状、大分市外の場合は医師がタクシーに保育器を積んで出動し現場で自治体救急車を要請して搬送する体制になっており、時間がかかっています。今後の課題と考えます。県外出動の増加は上記のような理由です。

(研修・教育)

新生児蘇生法講習会は新型コロナウイルス感染の流行に伴い2021年はほとんど開催できませんでした。看護学生対象の2回だけで一次コース計21人の受講となりました。ここ2年間、助産師や救命士への新規の講習会や認定更新のためのスキルアップ講習会を開催することができておらず、現場での新生児蘇生のスキルの低下が危惧されます。できるだけ工夫しながら対面での講習会を再開していきたいと思います。

医学生教育も新型コロナウイルス感染流行のあおりを受けてほとんど中止となり、WEBでの座学となりました。例年、医学生には新生児の沐浴や哺乳など他ではなかなか体験できない実習を行い、好評を得ていましたので、流行収束の折には是非再開したいと思います。

研修医には健常な新生児から軽症の病的新生児までを中心に診てもらっています。当院の特徴として健常な新生児をたくさん診ることができる点があり、正常を知ることによって異常に気付けるように教育していきたいです。

(今後の方向性)

2020年にアルメイダ病院の周産期センターが閉鎖され、現在大分県内では4つの周産期センターが稼働しています。当初は、ベッドが足りなくなるのではと危惧されましたが、出生数の減少もあり、幸いにしてベッドが足りずに他県に搬送する事例は発生してい

ません。しかし、年に何度かは4施設とも忙しくベッドの余裕があまりなくなることがあります。今後とも4施設で連携をとりながら他県に搬送することがないように運営していきたいです。

従来、アルメイダ病院が主に担っていた社会的ハイリスク妊婦(貧困やシングルマザーなど)の分娩が当院で増加しています。分娩だけでなく、その後の養育まで含めたサポートが必要で、保健福祉センター、県市町村の母子保健担当、児童相談所、訪問診療・看護、教育委員会などと連携をとりながら継続性のあるサポートを続けていきたいです。

昨今の周産期医療全般の課題として、NICU退院後の医療的ケア児へのサポートや大規模災害時への備えが挙げられます。医療の進歩に伴い救命率は向上しましたが、一方で、自宅で医療的ケアを継続して必要とする児は増加しています。養育の主体は家族ですが、それだけでやっていけるものではなく、訪問診療・看護、行政との連携、レスパイトの拡充を行っていききたいです。また、いつか来るであろう南海トラフ地震を想定して、安否確認・避難誘導・安全の確保などを地域と協働して進めていく必要があると考えます。

当院は小児科専門医養成のための基幹施設となっています。若い先生たちにとって魅力ある周産期医療を提供できるように教育面を充実させていきたいです。

今後ともご指導のほどをお願い申し上げます。

【新生児科診察担当医】

月曜から金曜まで毎日行っています。

月	火	水	木	金
赤石	飯田	慶田	赤石	飯田
	慶田		米本	米本

先天異常、発育発達の問題、育児不安など新生児・乳児期の発育発達全般に関して診療しています。必要があれば小児科、小児外科など他科との共同診療、または行政、福祉、学校などとの連携も行っています。

(文責: 飯田浩一)